

大学史ノート応援歌の作詞者畑耕一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学史料センター 公開日: 2009-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯澤, 文夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/3637

応援歌の作詞者畑耕一

飯澤文夫

一 畑耕一と明治大学



畑耕一（はた・こういち）は、大正から戦前期にかけて、小説家、評論家、劇作家、ジャーナリストと、幅広く活躍した人物で、大正一四年（一九二五）に本学講師、昭和二年（一九二七）からは教授として教壇に立った。（写真は渡邊白蘭氏提供）

明治二九年（一八九六）に広島市堀川町（現中区）に生まれ、東京帝国大学英文科を卒業して、東京日日新聞（後に国民新聞社学芸部長）に入社、記者として活躍する傍らで「三田文学」などに小説を発表、その後、松竹キ

ネマ（研究所長、企画部長）に移り、映画や大衆演劇にも関わった。昭和一九年に広島県可部町（現広島市安佐北区）に疎開し、そのまま東京に戻ることなく、三三年に六十五歳で亡くなった。去年一月に五十回忌を迎えた。本学を辞した年は疎開時かと推測されるが、現在のところ、昭和一五年の在職までしか確認できていない。本学の他、日本大学講師（「演劇講座」）と上智大学講師を勤めた。

作家としては、「永井荷風や久保田万太郎などから多分に影響を受けた浪漫的耽美的」（『日本近代文学大辞典』講談社）と評され、芥川龍之介の序文を得た小説・戯曲集『笑ひきれぬ話』（大正二四）や小説『棘の楽園』（昭和四）など、多数の作品を残している。

本学に招かれた経緯は詳らかではない。大正一四年には「文芸概論」を担当、昭和七年の文科専門部発足時に、学生募集用として作成された『明治大学文科要覧 一九三二』には、文芸科で「新聞雑誌編輯」と「性格学」を担当、新聞科で学科担当講師となっている。『明治大学文学部五十年史』よれば、昭和一〇年代には、「文芸概論」「ジャーナリズム研究」「映画研究」を担当している。映画研究部顧問も務めた。また、自らの豊富な人脈を活かし、文学やマスコミ界で活躍する人物を招いて、サロンの雰囲気「文芸座談会」を、大学周辺の喫茶店やランチョンなどで開いたりもした。

畑の本学における足跡は、こうした教育上の功績もさることながら、注目すべき事柄が二点ある。

第一点は、尾佐竹猛らとともに昭和初期に起こった文科復活運動に参画したことである。

昭和二年に津村卓男が文化復興の目的で創刊した雑誌「駿台文学」の同人、昭和六年の「文科設置懇談会」のメンバーとなって、運動を推進した。

第二点は、応援歌・学生歌三曲の作詞を行ったことである。昭和三年の「若人『明治』の歌 復興祝祭記念歌」

（高階哲夫作曲）、同五年の「輝く明治」（山田耕筰作曲）、同年の「明治大学応援歌」（山田耕筰作曲）である。「若人『明治』」の歌「復興祝祭記念歌」に際して、「質実な学生の氣息をもった言葉」を選び「本当の明治大学若き感激をそこに出したいと考えた」（『駿台新報』昭和三年四月二二日）と、熱き思いを吐露している。

こうした畑の功績を、大学史の中で正当に評価し、顕彰していかねばならないと思う。そのことは後日に期すとして、以下に、畑に関してこれまで行ってきた資料調査の概略と、資料の所在状況を報告する。

二 著書等の本学への寄贈

一九九七年一〇月に、未亡人畑愛子さんから千代田区神田小川町在住の関係者を通じて図書館に、著書、レコード、作詞歌詞集が寄贈された。中央図書館の明大文庫に収蔵された。

著書は、前記の他、『広島大本営』『随筆 愚人の祭壇』『句集 蜘蛛うごく』『世界童話集 上、下巻』『最新国文読本』など三十三冊で、ほぼ全著作である。

レコードは、戦前のSP二枚で、それぞれ両面に、「輝く明治大学／明治大学応援歌」（コロムビア）、「明治大学校歌／若人『明治』の歌」（ビクター）が録音されている。いずれも、管弦楽付合唱で、明治大学学友会音楽部員が歌っている。戦前の歌唱法を知る貴重な音源である。これらは、国立音楽大学図書館の協力を得て之日に変換し、大学史資料センターに収めた。

歌詞集は、畑が作詞しレコード化された歌謡曲、映画主題歌、歌曲、明大応援歌などの歌詞と、松竹俳優座談会「恋愛講座」の記録を一冊にまとめたものである。

これらは中央図書館の明大文庫に収蔵された。

三 広島大学附属図書館

畑が亡くなった昭和三三年に、未亡人から広島大学附属図書館に、放送劇台本、朝日新聞連載小説（切抜帖か）、ラジオ放送原稿、スクラップブックなど六十五点が寄贈された。

ところが、平成一五年に未亡人が亡くなり、遺品を引き継いだ渡邊白蘭氏（後述）が、資料の一括保存を願って同館に照会したところ、すべてが紛失していることが判明した（『中国新聞』平成一六年六月二七日）。寄贈礼状に添付されたリストによれば、原稿三点、スクラップブック十三冊など、復元することのできない資料が多数含まれており、かえすがえすも残念である。

四 渡邊白蘭氏所蔵資料

渡邊氏は畑の甥に当たる。広島市西区在住で、煎茶・華道高遊外売茶流の家元である。畑が亡くなったのは、同氏が高校生の時だそうである。鼻梁が高く細面の風貌は、どこか畑を髣髴させられた。畑に子供がなかったことから、未亡人死亡後に、約二百点の資料を託された。

二〇〇五年八月に同氏宅を訪問し、次の資料を拝見した。これらの資料の一部は、同氏から、複写等により次掲の広島市立中央図書館広島文学資料室に寄贈されている。



ア スクラップブック 第一九集。内容は、葬儀など死後の記事。

第一〇一八集は広島大学附属図書館で紛失。

イ 本学図書館長（後藤総一郎）から畑愛子氏宛寄贈礼状（一九九七年一〇月一日付）

ウ 広島大学附属図書館長から畑愛子氏宛寄贈礼状（昭和三二年一月一七日付）

エ 自筆履歴書

オ 写真。大正末期頃に横田英雄学長・山田耕筰らと 写したものの、記念館前で卒業記念と思われるもの、など。

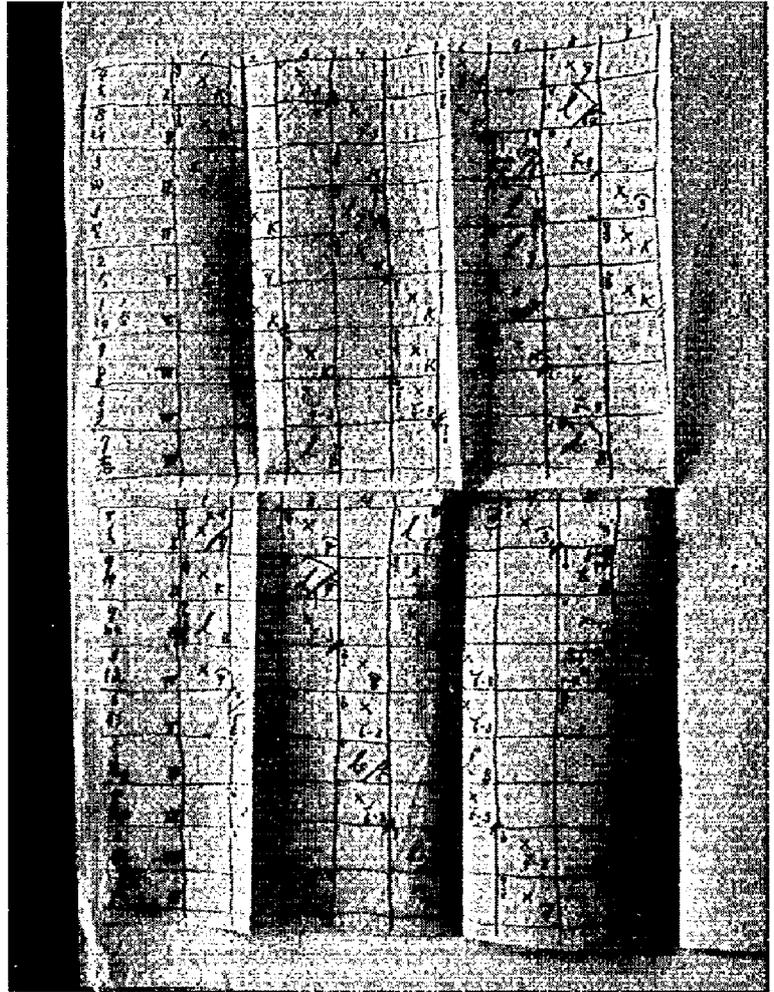
カ 作品原稿、畑耕一宛書簡、その他の遺品

（写真は、渡邊白蘭氏と残されたスクラップブック）

五 広島市立中央図書館広島文学資料室

鈴木三重吉、細田民樹、阿川弘之、畑耕一ら広島に関わりのある文学者二十名の関係資料を収集している。これらは、広島市立中央図書館編刊『広島文学関係資料目録』（平成一六年三月）にまとめられている。同目録は本学図書館に寄贈され、畑関係部分はコピーにて大学史資料センターに収めた。

同目録には、畑関係資料三〇五点が掲載されている。内訳は、著作（著書、新聞・雑誌掲載）一四三点、原稿 一二点、



葉書・封書 一四〇通、色紙・掛け軸 四点、写真 二枚、その他 四点）である。葉書・封書は殆どが、文学上の弟子であった四宮美智子宛と郷里の後援者と思われる伊勢木武藏宛に出したものである。その他には、本学図書館からの寄贈礼状の写しが含まれている。資料は、中性紙の段ボール箱三箱に収納され、書庫に保管されている。

二〇〇五年八月と二〇〇六年八月に、悉皆調査をした。目録刊行後の追加があり、資料点数は約三五〇点に及んでいた。

この中から、本学に直接関わる資料を一、二紹介する。

一つは、昭和一三年（一九三八）九月二一日付けで四宮に宛てた封書に、ハナガミに書きつけて同封された、六大学野球秋季リーグ明治・帝大第二回戦のスコアである（写真）。この試合は明大が一對〇で辛勝した。畑は四宮宛の手紙で、秋季リーグは早稲田が優勝するだろうと記しているが、この年、明大は春秋を連覇し、第二期黄金期を作り上げている。

もう一点は、同じく、昭和一九年四月二八日付けの封書で、疎開先に東京から明大の卒業生が慰問に来て、東京の

様子を知らせてくれたと記されている。

また、畑が寄稿した書物雑誌「奇書」第一巻第五号（文芸資料研究会 昭和三年一〇月）裏表紙の出版広告に、「変態文献叢書」追加第四として、尾佐竹猛の執筆で、拷問、死刑、サディズムやマゾヒズムの心理探求などを内容とする著作予告が掲載されている。それも、全部脱稿するまで書名を定めたくないというのが著者の意向であるとのコメントが付され、題未定のままである。尾佐竹はこの頃、文芸資料研究会からは出版しておらず、同叢書も本編八巻と追加三巻で終わったようである。その後どのようなようになったのか興味深い。

六 菩提寺

鶴原山離障院真倉坊広寂寺（広島市南区稲荷町二一五）で、JR広島駅から広島電鉄本線五分の「稲荷町」で下車し、徒歩約二分、元広島東署近くにある。

畑家と渡邊家の合祀で、「天明五年広島に於て漆屋平蔵と称し畑家を創始す」「平蔵長男耕一妻 畑愛子」と彫られている。

昨年来の調査では、渡邊白蘭氏、広島市立図書館司書得本玲子氏にお世話になりました。また、校友の高瀬淳氏からも御示唆をいただきました。御礼申し上げます。